

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

平成 24 年 10 月 16 日

派遣者氏名（専門分野）	八重樫 徹	（ 哲学 ）
-------------	-------	--------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	エトムント・フッサールの現象学における自由意志と行為に関する研究
-------	----------------------------------

派遣期間

平成 24 年 7 月 10 日 ～ 平成 24 年 9 月 8 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	ドイツ	ケルン	ケルン大学 フッサール文庫	ディーター・ローマー教授

派遣先で実施した研究内容

エトムント・フッサールの現象学的哲学における意志の自由と倫理的行為の理論について、主に未公刊の資料にもとづいた研究をおこなった。

申請者はこれまでフッサールの倫理学を主な研究対象としてきたが、その際依拠したテキストは、すでに公刊されている倫理学関係の講義草稿や、2008 年から 2009 年に同じくケルンに研究滞在した際に調査した感情と意志に関する研究草稿群（『意識構造の研究』と呼ばれる）など、大部分がフッサールの前期・中期思想に属するものだった。今回の滞在中は、これまで十分に参照することのできなかつた後期の研究草稿や、未公刊の講義草稿を中心に、調査をおこなった。その際、ローマー教授の助言を仰ぎつつ、フッサールの膨大な草稿の中から、自由の問題を考えるうえで重要と思われるテキストを選び、重点的に研究した。また、倫理学に関する後期の研究草稿の一部は、現在ベルギーのルーヴァンにあるフッサール文庫で、公刊に向けて編集作業が進められているため、その編者の一人であるルーヴァン・カトリック大学のトーマス・フォンゲーア博士とも連絡をとり、助言を仰いだ。フッサール文庫に保管されている未公刊の資料は基本的に複写が禁止されているため、同文庫で閲覧しながらメモをとり、重要な箇所のみ全文を書き写すというかたちで調査を進めた。一部、未公刊だがすでに編集作業が終わっているテキストのみ、フォンゲーア博士の御高配によりコピーをいただくことができた。

今回重点的に研究したのは、フッサール文庫の草稿整理番号で AV, AVI, BI, E III というグループに分類されている後期の研究草稿である。これらの草稿では、徳、義務、自律、人格、目的論、愛、死といった鍵概念をめぐる考察が展開されている。滞在中は、フッサールの中期末までの思想との連続性、彼の体系的思想の中で上記のテキストが占める位置、そして意志の自由をめぐる現代哲学の議論に対してこれらのテキストが持ちうる意義を念頭に置きつつ、研究をおこなった。フッサール文庫には、一次資料だけでなく、古典的なものから最新のものまで、フッサールに関する多くの二次文献が集められている。また、世界中から優れたフッサール研

研究者が訪れ、研究をおこなっている。そうした恵まれた環境の中で、関心の近い他の研究者と意見交換をしながら、充実した研究滞在を送ることができた。

なお、今回の滞在中に得られた成果をもとに、フッサールの後期倫理学に関する英語論文“Love and Absolute Ought in Husserl’s Later Ethics”を現在執筆中である。

### 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

現代哲学において、意志の自由の問題は、自然主義 対 反自然主義という図式の中で議論されることが多い。これに対して、フッサールのとりわけ後期の思想においては、自由の問題が倫理学の問題として、自律や責任といった概念との関連の中で問われる。そこでフッサールが自由をどのように考えているのかを明らかにすることが、当初の目的であった。

明らかになったのは、フッサールの後期の倫理学において、カント的なモチーフが重要な役割を果たしているということである。もとより、前期・中期の倫理学講義などでも、彼はカント倫理学との対決を試みていた。だが後期になると、義務と傾向性、道徳性と幸福といったカント的な二項対立を自らの倫理思想の中に積極的に取り入れようとする傾向が顕著になる。また、理性がいかにして実践的でありうるか、つまり具体的な状況における意思決定に、理性がどのように関わるのかを問うことが、自由の可能性を問うことにほかならないと考える点でも、後期フッサールの自由の問題へのアプローチはカント的だと言える。他方で、今回重点的に研究した草稿で、彼は自らの中期までの倫理学の立場を自己批判し、理性の限界をなす不合理性に目を向けている。人間の有限性、愛や死といった、フッサールが形而上学的と呼ぶ主題群への積極的なアプローチも、彼の後期倫理思想の特徴をなしている。まとめると、後期フッサールが試みたのは、具体的な現実の中で生きる感情をもった人間の倫理学だと言える。

### 派遣後の研究発表の予定

上で言及した英語論文を、国際ジャーナル *Bulletin d'analyse phénoménologique* に投稿する予定である。(ただし、投稿先と論文タイトルは変更の可能性がある。)